

ポルカドット号探検記

「手術道具としての漫画」

松本市美術館館長 小川 稔

手塚治虫後期の長編作品『陽だまりの樹』の主人公、府中藩の侍医手塚良仙は実は作者の曾祖父で実在の人物だ。屈折した心理のブラック・ジャックと異なり、こちらはまっすぐな心持ちの人物。蘭方医の良仙は大阪の緒方洪庵の適塾で学び、福沢諭吉とも同僚だった。適塾が後の大阪大学となり、手塚自身がそこで医者になるべく学んだことはよく知られている。作品中の良仙は女好きの愛すべきキャラクターなのだが、幕末社会の行き詰まりを抜け出そうと必死にもがく祖先の生き方に手



『ブラック・ジャック』「ちぢむ!!!」1974年 ©Tezuka Productions

塚が共感し、ファミリィ・ヒストリーとして描いたのだろう。大河ドラマのように多数の登場人物による『陽だまりの樹』と天才外科医と可愛い助手ピノコが活躍する『ブラック・ジャック』、どちらも主人公が旧弊な権力と戦うことで共通している。

『ブラック・ジャック』の愛読者ならば貧者の手術に平然と3千万円を要求する主人公の態度に驚きはしない。結局、B・Jは予想通り難しい手術を成功させ、患者からその報酬を受け取りはしないからだ。金まみれの世の中に、対する皮肉で残酷な物言いは、偽善にみちた現代社会のアンチヒーローにふさわしい。

だが、諸悪渦巻く社会に鋭いメスで切り込む主人公に読者は感心しつつ考えさせられる。一編ずつの現代の寓話は矛盾に満ちているようで遠くから見れば一つの筋道が見えるだろう。ヒューマニズムという遠い道が。臓器移植に安楽死、生命の倫理をめぐる議論は今日も続いている。

ART FUL

2024.4 | 77

松本市美術館 NEWS [あーとふる]

ART EXHIBITION GUIDE

当館学芸員 大島 武

「いこう 患者が待ってるぞ」



©Tezuka Production

黒いコートに蝶ネクタイ、全身傷だらけで無免許にして天才外科医のブラック・ジャック(B・J)。今から約50年前、マンガ家であり医者でもある手塚治虫が少年雑誌で生み出したこのキャラクターは、その風貌やリアルな手術シーンなどに加え、手塚ならではの医療や命の尊厳をテーマにしたストーリーの数々で、子どもばかりでなく大人にも大きな衝撃を与え、魅了しました。そして今なおドラマ化されるなど不動の人気を誇っています。

しかし、『ブラック・ジャック』の雑誌連載が始まる頃、手塚治虫は人生のどん底にいました。劇画ブームの到来により「手塚は古い、終わった」とさえ言われ、テレビアニメの仕事が暗礁に乗り上げて会社が倒産。多額の負債を抱えていたのを救ったのが少年誌での最初の4回読み切り企画でした。第2室では、その4回の直筆原稿を一挙公開しています。

『ブラック・ジャック』は、読み切り形式の1話完結で全243話からなります。B・J本人の過去や経歴、人格形成の話(第3室「B・J遍歴」)。神業のようなオペで命を救う対価として法外な治療費を請求、その真意(3室「命VS金」)。人間と動物



手塚治虫 ©Tezuka Production



『ブラック・ジャック』「ときには真珠のように」1974年 ©Tezuka Production

との関わりの中から浮かび上がる『生きる』ことの本質(3室「人の命VS人でないものの命」)。手術が成功しながら別の理由(戦争、環境、寿命など)により失われる命(3室「手術は成功したが...」)。手塚が本作に込めたさまざまなテーマは、今、地球上で起きている事象をまるで見透かしていたようでもあり、この作品の時代と場所を超えた普遍性、先見性も大きな魅力と言えましょう(第4室で関連展示)。

B・Jと手塚治虫というふたりの天才。その秘密に迫る展覧会です。

手塚治虫

ブラックジャック展

50th Anniv. Tezuka Osamu's BLACK JACK Exhibition

会 期 / 2024年4月13日(土)~6月2日(日)

休 館 日 / 月曜日(ただし4月29日と5月6日は開館)、5月7日(火)

開館時間 / 9:00~17:00(入場は16:30まで)

観 覧 料 / 大人1,500円、大学高校生・70歳以上の松本市民1,000円

※中学生以下無料、障がい者手帳携帯者とその介助者1名無料 ※20名以上の団体は各200円引き
 ※オンラインチケットは100円引き(大人・大学高校生のみ) ※大学高校生と70歳以上の松本市民は、観覧当日、証明書(学生証、免許証等)の提示が必要

主催 / 松本市美術館、NHK長野放送局、NHKプロモーション
 共催 / 信濃毎日新聞社、市民タイムス企画協力 / 手塚プロダクション 特別協力 / 秋田書店

Relay Essay

本当のフィンランド

当館学芸員 中澤 聡

5年前の初夏、妹とフィンランド旅行に出かけた時のこと。偶然フェリーで相席になった2人のフィンランド人マダムに声をかけられた。「どこから来たの?」「何泊するの?」「質問の嵐にぐったりする我々。一方、彼女らは観光地を巡る計画に納得がいかなかったよう。」「はるばる遠い国から来てくれたのだから、本当のフィンランドを見せてあげたい!」とドライブに誘われた。

若干年期的に入ったボルボに乗せてもらい、高速道路をものすごいスピードで走った先に待っていたのは、静かな湖畔と、どこまでも続く森だった。見ず知らずの日本人にどうしても見せたかったのは、自国の自然の姿だった。

今夏、当館ではノルウェー、スウェーデン、フィンランドの絵画を紹介する展覧会を開催する。出品作品のほとんどは1900年前後、北欧美術の黄金期と呼ばれる時代に制作された。19世紀、それまでフランスやドイツの芸術に影響を受けていた北欧の画家たちは、ナショナリズムの高まりを背景に、独自の芸術を模索するようになる。注目したのは自然、神話や民間伝承の物語といった北欧特有のモチーフ。これら題材が絵画や挿絵の世界に表され、独自の芸術が開いていく。

興味深いのは、このイメージの視覚化が、広く人々に国のイメージの共有を図ることを可能としたという点。北欧の絵画は自国のアイデンティティ形成とも深いつながりがあるのだ。あの親切的な2人が紹介してくれた「本当のフィンランド」にも、わずかながらも北欧絵画がもたらしたイメージの視覚化と共有が影響しているのだろうか。

いずれにせよ、わたしにとつての「本当のフィンランド」は彼女らによってすっかり確立してしまった。

松本市美術館 NEWS あーとふる 編集・発行



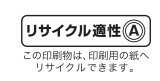
〒390-0811 長野県松本市中央4-2-22
tel 0263-39-7400 fax 0263-39-3400
https://matsumoto-artmuse.jp



松本市美術館公式 SNSはこちらから▶ X(旧・Twitter)



Instagram



視る

《赤い鳥の居る風景》

当館学芸員 鵜川 枝里



作者：上原正三
 作品名：赤い鳥の居る風景
 技法・材質：油彩・キャンバス
 制作年：1966年
 サイズ：90.9×116.7cm

「リングが美しいのではない、それがそこにあることが美しい」。指導に当たるとき、上原がよく引用していたセザンヌの言葉である。上原の言葉の全てがこの言葉に尽くされている。単なる写生を突き抜

けた心象風景、もうほとんど抽象画のよう。ここを境に作風が大きく転換した重要な一作だ。自己の感性を一気に叩き出したような色彩は純粹で鮮やかであり、観る者の感性、想像力を掻き立てる。上原のほとんどの作品には鮮やかな赤色が描き込まれており、「赤い鳥はまさに赤色への執着を表しているかのような作品だ。」
 上原は明治39年、東筑摩郡和田村（現松本市）に生まれた。村山槐多らの絵に刺激を受け、画家を志す。大正13年に上京し、川端画学校で藤島武二に師事。昭和12年に帰郷し、長野県内で教鞭を執る傍らも描き続け、昭和39年、自身の子育てがひと段落したことをきっかけに依願退職し画業に専念した。その頃から描き始めた上原の大きなテーマの一つであった裸婦連作では、それまでの三原色を用いたような鮮やかな色彩はほとんど削られ、作者独自の透明なブルーに支配されていく。
 実在感を表現の軸とし、対象そのものを直感的に表出させた上原の作品は、日常から生まれる感性であり、対象を通じて視る上原正三の内面そのものであったのかもしれない。

身近な ART 「ロゴに見るブランドイメージ」

当館学芸員 武藤 美紀

通勤路の一角にパン屋がオープンしたが、別のことが気になってまだ一度も足を踏み入れたことが無い。気になるのはその店名。日本人には馴染みのない外国語の店名が、平仮名の丸ゴシックで看板に可愛らしくあしらわれているのだ。日常的に知っている言葉ならば気にしなかったであろう、語句と文字とフォントのちぐはぐな関係にモヤモヤが続いている。
 さて、写真は職員が日常使う自前のマグカップの数々。保温性の高い機能派のものや陶芸家の焼き物もあるが、カップ裏に書かれたメーカーのロゴが目が行く。インテリアデザインのイッタラ、その子会社で食器ブランドのアラビア、ファッシュイオンブランドのマリメッコ。いずれもフィンランドを代表するブランドである。アルファベットは26文字しかないのに、ロゴに使う文字やフォントといった、ブランドのイメージを決定づけるタイプグラフィのセレクトは重要だ。ブランドの名称はその語意が気にならないほど、いまや一目でそのブランドロゴと視認できる。
 そして、今夏は北欧3か国からはるばる作品がやってくる。デザインに関する展覧会は幾度も日本で開催されているが、絵画の展示は珍しい。どんなグッズがショップに並ぶのか、合わせて楽しみたい。



人物往来

3月末日をもって副館長の忠地智司、企画運営担当の東山睦子、美術担当の村上萌が異動となりました。また、美術担当の鵜川枝里が退職しました。4月1日より副館長として武藤美紀、企画運営担当として原智之、美術担当として原澤知也、北原麻椰、藤原裕希が新たに着任しました。今後とも松本市美術館をよろしく願っています。なお、今号の執筆者職名は3月31日時点のものです。



Workshop report

特別展「須藤康花ー光と闇の記憶ー」関連プログラム

対談会

「須藤康花の世界を読み解く」

須藤康花の父であり、康花美術館館長を務める須藤正親氏をお迎えし、対談会を開催しました。人となり、作品との向き合い方、さらには死生観まで、須藤康花の世界に触れる貴重な機会となりました。



ワークショップ

多摩美術大学で銅版画を専攻した須藤康花が実際に作品制作で用いた技法を体験しました。

大人向け じっくり銅版画体験

完成形を頭に描き、そこから逆算して綿密なスケジュールを立てる必要がある銅版画。濃淡をつける「アクアチント」技法では、「頭がおかしくなりそう!」との声があちこちから…。その分、刷り上がりの喜びはひとしおだったようです。



小中学生向け 楽しい紙版画体験

厚紙の表面をニードルで描いて、切って、折り目をつけて。自由に版を作ったら、好きな色のインクをのせて、いざプレス機へ! 重たいハンドルをゆっくりに回して。刷り上がりの瞬間は、みなさん真剣そのものでした。



MATSUMOTO CITY MUSEUM OF ART 2024年度開催の展覧会 今年度も多彩な展覧会を予定しています!

北欧の神秘

ーノルウェー・スウェーデン・フィンランドの絵画

■2024年7月13日(土)～9月23日(月祝)

19世紀後半から20世紀初頭、北欧3か国の絵画芸術は花開きます。描かれたのは、厳粛で壮大な自然、幻想的な神話やおとぎ話の世界といった神秘的な北欧の姿でした。本展では、各国の国立美術館が所蔵する作品が一堂に集結、北欧絵画の知られざる魅力に迫ります。



ロベルト・ヴィルヘルム・エークマン(イルマタリ)1860年 油彩・カンヴァスに貼った紙 フィンランド国立アテネウム美術館蔵
 Photo: Finlands Nationalgalleri/Hannu Aaltonen

生誕150年 香取秀真展

■2024年10月12日(土)～12月1日(日)

鑄金家・香取秀真(1874-1954年)は、東洋や日本の古典紋様や形に基づきながらも時代感覚を取り入れた作品を生み、工芸家初の文化勲章を受賞しました。正岡子規門下の歌人としても知られ、松本への疎開時にも作品を残しています。本展では、香取秀真の珠玉の作品群を紹介します。



《熊香炉》千葉県立美術館蔵

フィロス・コレクション ロートレック展 時をつかむ線

■2025年1月18日(土)～4月6日(日)

ダンサーや娼婦、似非紳士などの日常をユーモアと愛情あふれる眼差しで描写したロートレック(1864-1901年)。世界有数のロートレック作品を有するフィロス・コレクションの素描作品を核に、版画やポスター、書籍など約240点を展示します。



《ディヴァン・ジャポネ》1893年 リトグラフ